

# 雑記抄

## 足元からの新年三題

二〇〇八年（平成二〇）、戊子（つちのえ子）のネズミ年の新年に当たり、多種多様な今日の課題や問題の中から三題を取り出して新玉の年の始めの語り草としたい。

**地域ケア**：ずばり、高齢者が安心して暮らせる地域ケア体制の整備を呼びかける日本医師会天本常任理事は、

- ・在宅医療のニーズに応え、
- ・医師の訪問や家庭医の診察に努め、

・住宅、医療政策と連携し、  
・畳の上での大往生に向けた地域ケアなどを提言している（要約）。

他方、消費者協会などでは、地産地消の取り組みによるノーレジ袋運動や加工食品の実践を通して「地域に根づいた活動」が展開されている。

いづれにしても、足元からできる地域ケアとは、「向こう三軒両隣」との日常的交際（いわば普段着のおつきあい）であり、連帯性の確保（おとなりとのつながり）

に他ならない。昨今の「隣は何をする人ぞ」といった近隣の遠距離（近くて遠い隣家）を短縮しなくては…。

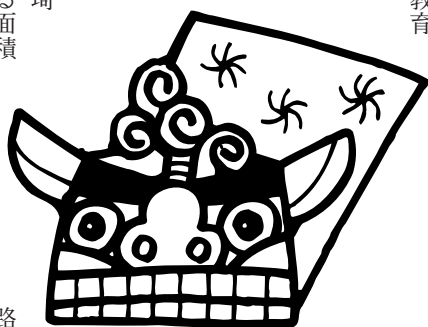
**優れた農業者**：ずばり、「優れた農業者は優れた教育者」とは正に至言である。少子・高齢

化が進み、後継者難が一層深刻となる農業経営（もちろん他の業種にとつても）には、

- ・耕作放棄地が約39

万ヘクタールで、埼玉県にほぼ匹敵する面積であり、

・農地情報は、市町村・農業委員会・農協などがバラバラに持ち、  
・企業の農業参入による農地集約で起こる混乱（用水や管理など）に対応した農地改革の仕組みづくりが必要とされている。  
いづれにしても、足元からでき



る農地改革とは、「農地は自ら耕作する」との考えが続く限り、農地活用は現制度下で実施すべきという提言（札幌市在住の馬場宏氏）もあり、団塊世代の「田舎暮らし」を強力に推進してはどうであろうかというのである。

このためにも、「土と生きる優れた農業者こそが優れた教育者」であり、近代農業のノウハウを着実に教示・継承する地元営農者が居なくては…。

**蝕み及び寄る温暖化**

…ずばり、地球の温暖化は国際社会が直面している深刻な課題であり、今年七月に開催される北海道洞爺湖サミットの大きなテーマであると説く小磯修二釧路公立大教授によれば、

・熱バスの推進：ドイツのミュンスター市（人口28万人）が北海道に近い気候で、冬の長い暖房のCO<sub>2</sub>排出が多かったのを、十年間で21%削減する実績を挙げ、フライブルク市（ミュンスター市よりも五年も早く環境都市の称号を取得）の「歩行者天国」

は、一四方に及ぶ中心部に歩行者と自転車と路面電車が共存する空間を作り、いわゆる「遊びの道路」を導入しているというのである。

・温暖化がコメを直撃し、九州を中心に西日本で高温障害が多発し、  
・北極の海水が縮小し、オホーツク海では流水が減って資源が急減し、  
・小さな島国が海面下に沈むという。

いづれにしても、足元からできる脱温暖化とは、ガソリンや灯油の高騰に対抗する厚着（もちろん流感との関連も重視）、湯たんぽ、懐石料理、石行火（石を温めて足元に入れて寝る）などの「昔がえり」を実行し、ゴミ減らし・ゴミ焼き禁止を守らなくては…。

**わが町らしい「エコ社会」**を構想し、田園環境を整備し、地域ぐるみのケアを実動するための、今年の町の風の吹き回しや如何であるのか。

前中央分館長

尾池隆男